

第19回「ハートミーティング」意見交換の内容について 保健師人材育成自主研修グループ（京都市保健師長会）

★参加メンバーからの主な声

- 保健師の仕事は、市民の健康を守り、体力の保持と向上を図るため、健康づくりや健康上の問題を抱えている人に寄り添い、共に感じて、その人にあったサポートをして行く事である。「共に感じる」ということを、保健師や看護師は教育の過程で徹底されている。



- 以前に制作した、おなかの中に赤ちゃんがいますという「プレママバッチ」の活用策について、京都市未来まちづくり100人委員会のメンバーから、職員では思いつかないような提案が示された際に、市民のエネルギーを強く感じた。
- 市民の問題を市民の提案によって解決していこうという取組を、保健センターでも試みており、上京保健センターでは、地域の健康は自分たちが守るという、区民意識の高揚を目標に掲げ、健康づくりサポーターの養成を始めている。
- 下京保健センターでは、「下京の歌」に合わせてメタボビクスを行っており、来年度からスタートする下京区基本計画の中の「みんなで楽しく歩いて健康になる」取組みに、繋げていきたいと考えている。
- こころの健康増進センターでは、障害のある市民もない市民も、我々職員も何か一緒に物事に取り組むことを通じて、共に達成感が持てたなら、お互いがわかり合えるのではないかと思います、イベントを企画段階から一緒に行い、達成感を味わうことができた。今思えば、市長が言われる「共汗」というものを、その時に実感した。
- これまでは、課題の解決に向けた取組のため、行政主導でネットワークを構築してきたが、この方法では連携がうまく機能しない面もあるため、行政主導ではなく、NPO事務局に中核的役割を担ってもらうことも含め、今後に向けた検討を進めている。
- 児童虐待の問題は、地域の人々の支援が必要であり、隣近所の人々が声を掛けてあげることが大切。地域のつながりという事なしには、虐待の問題は解決していかないと感じている。

★市長からのコメント

- すばらしいグループを作ってくださった。地域や学校・幼稚園にいかに専門家が入っていった連携できるかが大事。連携というのは繋がるというだけでなく重なるということでもあり、お互いの領域が少しずつ重なった部分があってこそ、本当の連携が出来る。



- 人に寄り添って、その人の力を引き出し、そして感じる事が一番大事。優しいという字は、憂いる人に寄り添うと書く。
- リーダーが70点、まわりのスタッフが残りの30点を足してあげれば、結果として100点の仕事ができ、更に、一緒に汗をかいて足しあう作用で100点が200点の仕事にもなる。汗をかいて高め合うという関係をみんなで作ることが大事。
- 議論だけではなく、目標に向かって一緒に汗をかくと達成感があるし、その時に本当の「きょうかん」になる。
- 行政から課題意識を持って、市民に投げかけるだけではなく、集まった人たちに課題を見つけて行政に提言してもらうことで、行政が意識していないテーマを見つける事ができる。
- プライバシー保護、個人情報保護も大切だが、地域の繋がり、職場の繋がり、人の繋がりが一番大事。
- 1つではなく性格の違うもの、異質なものの同士が結びつくと、良い意味の化学変化を起こすことがある。教育関係や環境問題、少年補導といった京都市の様々な活動を全部まとめることこそが「融合」であり、それができれば素晴らしいことだと思う。
- 現場で学ぶ事はとても大事な事。
市長に当選したら何をしたいか自問自答し、「命を大事にする」をマニフェストの一番に挙げた。命を大事にすることは、京都市政の課題が全て入っている。健康のためにまちを歩き、子どもやお年寄りに声を掛け、景色をみてもらい公共交通を使ってもらう。健康、環境、教育、子育て、観光、公共交通、危機管理、コミュニ

ティ，活性化。例えば病気が減れば国民健康保険の赤字解消にも繋がる。こうした視点で政策を徹底して，市民目線で，地域に立脚して融合することが大切。我々，基礎自治体の仕事。

- 人間の健康を見るのが保健師の仕事だが，人間の健康からは，都市の健康が見えてくる。そして京都市の財政の健康も見てくれていることに繋がっていく。保健師の仕事は偉大であり，皆さんには，その突破口としての役割を期待している。

